

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	アルバニア語に於ける2種類の補文構造の意味論的研究
Author(s)	井浦, 伊知郎
Citation	ニダバ , 24 : 86 - 95
Issue Date	1995-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047959
Right	
Relation	



アルバニア語に於ける 2 種類の補文構造の意味論的研究

井 浦 伊知郎

0. アルバニア語に於ける補文構造の分類

現代アルバニア語には、補文を導く3種類の不変化詞 *se*, *që*, *të* がある。

- (1) *Ai ë ndjeu se shkruante për gjithë popujt...*
 He 3.sg.acc. feel-aor.sg.3 write-impf.sg.3 for all people-pl.acc.def.
 (Kadare 1990:P.61)

「彼は（自分が）諸国民の為に書いているということを感じた」（*se*補文）

- (2) *Shoferi i tha që njeriun nuk e njohte.*
 driver-sg.nom.def. 3.sg.dat. say-aor.sg.3 man-sg.acc.def. not 3.sg.acc.
 know-impf.sg.3
 (Meçaj 1975:P.16)

「運転手は彼に、その男を（何者か）知らないと言った」（*që*補文）

- (3) *Qëllon të zgjatin shirat.*
 happen-sg.3 fall-subj.pl.3 rain-pl.nom.def.
 「ちょうど雨が降っている」（*të*+接続法動詞より成る補文）

*se*で導かれる補文と*që*で導かれる補文は、共に英語の *that* 節に相当している。*të*+接続法の補文は、統語論的に他の2種と区別される⁽¹⁾。

本稿では、これら3種の補文標識の内、主に *se* と *që* をとる補文構造について、その使い分けの条件を意味論的に考察する。

1. 従来の分類

1-1. Buchholz & Fiedler の記述

Buchholz & Fiedler (1987) は、どのような述語動詞がどのような補文標識をとり得るかについて、個別の動詞について網羅的に示している。分類の一部を簡潔に示す：

pëlqen 「気に入る」, vjen mirë 「うまくいく」, vjen mbarë 「うまくいく」, vjen keq 「まずい事になる」の場合：

që + 直説法（補文内容を事実として述べる場合）

të + 接続法（推測・起こりそうな事として述べる場合）

kujtohet 「憶えている、思い出す」の場合：

se + 直説法（補文内容を事実として述べる場合）

të + 接続法（推測・起こりそうな事として述べる場合）

「言う」「示す」行為の動詞 (verba dicendi)、

即ち them 「言う」, shkruaj 「書く」, shpjegoj 「説明する」の場合：

se（稀に që）+ 直説法

但し補文内容に「要求・依頼」の意味が含まれる場合：që + të + 接続法

分類の一部には、補文の内容に於ける「真実性」の判断が補文標識の選択に関わっている可能性が見える。これらは、補文内容の法性 (modality) と補文標識の選択との間に説明されるべき判断基準がある事を示している。ただし、「事実」とされる補文に対する se と që の選択が交差する例も見られるので、これですべてが説明できる訳ではない。

1-2. Finger の記述

Finger (1990) は që の接続詞的機能について、「聴き手の注意を喚起する様に機能」し、「聴き手はそれによって、話し手の内容のつながりを把握する事ができる」と指摘しており、që に於いて se とは明らかに異なる文脈上の特性が存在する事を示している。では、që が補文内容に対する注意を引き付ける役割を果たす時、se 補文は文脈に於いてどのような役割を果たすのだろうか。以上2つの先行研究を踏まえて検討してみよう。

2. テクストの分類

標準的現代アルバニア語で書かれたテキスト類から、動詞句補文、名詞句補文、形容詞（副詞）句補文を含む例文を全て取り出し、各文を主節に含まれる動詞（或いは名詞，形容詞，副詞）と、それぞれがとる補文標識の種類に従って分類した。以後、本稿では動詞句補文の傾向についてのみ考察する。⁽²⁾

5個以上の補文例を含む動詞の例のみを示したものが次の表である。

		se 補文	që 補文	të 補文
besoj	「信じる」	5 (71%)	1 (15%)	1 (15%)
bëj	「する・させる」	2 (10%)	4 (19%)	15 (71%)
di	「知っている」	47 (75%)	8 (13%)	8 (13%)
dua	「欲する」	0 (0%)	3 (15%)	17 (85%)
duket	「～に見える」	23 (88%)	2 (8%)	1 (4%)
filloj	「開始する」	0 (0%)	0 (0%)	44 (100%)
harroj	「忘れる」	14 (61%)	0 (0%)	9 (39%)
kujtoj	「憶えている」	15 (94%)	0 (0%)	1 (6%)
kuptoj	「理解する」	33 (87%)	5 (13%)	0 (0%)
lajmëroj	「報告する」	5 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
le	「～しよう」	0 (0%)	1 (6%)	15 (94%)
lë	「～させる」	0 (0%)	1 (4%)	22 (96%)
marr vesh	「聞く」	7 (88%)	1 (13%)	0 (0%)
mendoj	「思う」	20 (65%)	2 (6%)	9 (29%)
ndjej	「感じる」	21 (91%)	1 (4%)	1 (4%)
nis	「開始する」	0 (0%)	1 (6%)	15 (94%)
përpiqem	「努力する」	0 (0%)	1 (6%)	17 (94%)
pres	「待つ」	3 (15%)	0 (0%)	9 (75%)
pyes	「問う」	5 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
shoh	「見る」	18 (82%)	3 (14%)	1 (5%)
tregoj	「示す」	19 (95%)	1 (5%)	0 (0%)
them	「言う」	92 (72%)	21 (17%)	14 (11%)
vazhdoj	「続ける」	0 (0%)	0 (0%)	20 (100%)
vë re	「注意する」	6 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
vij	「来る」	0 (0%)	0 (0%)	7 (100%)

lajmëro「報告する」, tregoj「示す」, them「言う」の様な動詞は、多くの場合でse補文をとる。次にmarr vesh「聞く」, ndjej「感じる」, shoh「見る」等の様に主語の知覚を表す動詞も、多くの場合se補文である。また、besoj「信じる」, di「知っている」, duket「～に見える」, harroj「忘れる」, kujtoj「憶えている」, kuptoj「理解する」, mendoj「思う」もse補文の例が多い。一方、dua「欲する」, filloj, nis「開始する」, lë「～させる」, vazhdoj「続ける」等は、殆どすべての例でtë補文をとる。(3)

(4) Sot nuk dua të humb asnjë minutë, ...
 today not want-sg.1 lose-subj.sg.1 any minute-sg.acc.indef.
 「今日は一刻たりとも無駄にしたくない」 (Dini 1974:P.81)

(5) Filloi të fliste Artani.
 begin-aor.sg.3 speak-impf.sg.3 Artan-nom.def.
 「喋り始めたのはアルタンだった」 (Meqaj 1975:P.10)

英語では、動作の起動・継続・終動を表す動詞、即ち相動詞 (aspectual verb) の類 begin, start, continue, cease 等は、不定詞 (動詞により動名詞) 句を補文にとる。また「～したい」等の情緒的判断を表すwant型の動詞も不定詞をとり、persuade等の「肯定的使役動詞 (positive causative)」も不定詞をとる (稲田 1989)。

3. se補文・që補文の意味論的考察

3-1. 補文内容の「真実性」と文脈との関係

次に、se補文とqë補文の例についてのみ使い分けの頻度を示すと次頁のようになる。

一見して多くの動詞でse補文をとる頻度が高い。だがその一方で、di「知る」, kuptoj「理解する」, lajmëro「報告する」, mendoj「思う」, shoh「見る」, them「言う」といった動詞では、qëをとる例もある程度の頻度で存在しており、特にdiやthemがqë補文をとる例については、実際の資料数の上でも無視できるものではない。

se補文をとる述語動詞が、qëをとる場合もある。即ちthem「言う」, shkruaj「書く」, shpjegoj「説明する」等の述語動詞について、「～する様に」という「要求・依頼」の意味が含まれる文ではqë補文が後に続く。

(6) Unë them që ju të punoni më mirë.
 1.sg.nom. say-sg.1 2.pl.nom. work-subj.pl.2 more good.
 「私は、諸君がより良く働く様に言う」 (Buchholz 1987:P.513)

		se補文	qe補文
besoj	「信じる」	05 (83%)	01 (17%)
di	「知っている」	47 (55%)	08 (16%)
duket	「～に見える」	23 (92%)	02 (8%)
harroj	「忘れる」	14 (100%)	00 (0%)
kujtoj	「憶えている」	15 (100%)	00 (0%)
kupto	「理解する」	33 (87%)	05 (13%)
lajmëroj	「報告する」	05 (100%)	00 (0%)
marr vesh	「聞く」	07 (88%)	01 (13%)
mendoj	「思う」	20 (91%)	02 (9%)
ndjej	「感じる」	21 (95%)	01 (5%)
pyes	「問う」	05 (100%)	00 (0%)
shoh	「見る」	18 (86%)	03 (14%)
tregoj	「示す」	19 (95%)	01 (5%)
them	「言う」	92 (81%)	21 (19%)
vë re	「注意する」	06 (100%)	00 (0%)

3-2. 補文内容に於ける叙実性・非叙実性の考察

補文内容の真実性（正確には、話し手または書き手が判断する真実らしさ）を前提条件として用いられる述語動詞を、叙実述語（factive predicate）と呼ぶ（福地 1985, 稲田 1989, Kiparsky & Kiparsky 1970）。例(7)の動詞regretは、例(8)が確定した真実である事を前提として用いられる叙実述語である。

(7) I regret that the doctor didn't come on time.

「医者は間に合わなかった」

(8) The doctor didn't come on time.

「医者は間に合わなかった」

更に叙実述語には、単に「知る」意味に近い認知的（epistemic）なものと、「知る」事に加えて、その事に対する情緒的意味が付加される感情的（emotional）なものに分けられる。後者を真叙実（true factive）述語、前者を半叙実（semi-factive）述語と呼ぶ（Karttunen 1971）。⁽⁴⁾

この事をアルバニア語の例に当てはめようとするれば、補文内容の真実性が前提であると

されたse補文は叙実述語をとらなければならない。またqe補文をとる述語動詞は叙実述語でないもの、つまり非叙実述語でなければならない。

ところが実際は、besoj「信じる」、di「知っている」、mendoj「思う」、them「言う」がse補文をとる例はむしろ多い。diは半叙実述語に分類されるので問題は無いが、themやbesojやmendojは、補文内容の真実性が必ずしも前提とはされない非叙実動詞であり、むしろqe補文に対して頻繁に用いられることになろう。動詞 lajmëroj「報告する」の意味もthemに近く、ある例で報告された内容がたまたま事実であるからといって、他の例にもそれが適用できるとは限らない。従って、述語に於ける叙実性の有無のみによって補文標識の選択条件を説明するのは、不充分である。

3-3. 断定的述語に関する考察

基本的に、補文を含む複文構造は主節を中心としており、補文によって文字通り「補われる」形をとっている。つまり本来意味の中心は主節にあり、補文は補助的な意味を加えるだけである。しかし現実には必ずしもそうではない。例(9)は、(10)と(12)で示される2つの命題から成ると考えられる(福地 1985)。

(9) *He says we have to hire a woman.*

「彼が言うには、うちでは女性を採用したいんだ」

(10) *He says X.*

「彼は…と言っている」

(11) *We have to hire a woman.*

「うちでは女性を採用したい」

最初に述べた通りなら、2つの命題の内、本来は(10)が伝達の中心となるべきである。だが、「彼が言っている」という事は決して重要ではなく、むしろ「女性を採用したい」という事を、聴き手に最も伝えたい内容として発話する場合の方が(heに強勢が置かれる場合を除けば)普通である。その様な文では、主節の述語動詞が「断定(assertive)述語」であれば、伝達の中心は(11)の補文節に移る(Hooper 1975)。

断定述語は、補文の真偽に関する話し手、または主語の(基本的に肯定的な)断定を表し、主節よりも、補文内容の情報としての重要性を相対的に高くする機能を持つ。⁽⁵⁾

断定的述語は、叙実・非叙実述語の分類と重複する部分が多い。即ち断定的述語であると同時に叙実述語であるもの(di, kujtoj等)や断定的述語であると同時に非叙実述語で

あるもの (them, lajmëroj等) も存在する。こうした分類をアルバニア語の述語動詞分類について考えてみると、次の表の様に殆どのものがこれらの述語動詞のいずれかに当てはまる。

		se補文	që補文
○besoj	「信じる」	05 (83%)	01 (17%)
◎di	「知っている」	47 (55%)	08 (16%)
○duket	「～に見える」	23 (92%)	02 (8%)
▽harroj	「忘れる」	14 (100%)	00 (0%)
△kujtoj	「憶えている」	15 (100%)	00 (0%)
△kuptoj	「理解する」	33 (87%)	05 (13%)
◎lajmëroj	「報告する」	05 (100%)	00 (0%)
△marr vesh	「聞く」	07 (88%)	01 (13%)
○mendoj	「思う」	20 (91%)	02 (9%)
△ndjej	「感じる」	21 (95%)	01 (5%)
◎pyes	「問う」	05 (100%)	00 (0%)
△shoh	「見る」	18 (86%)	03 (14%)
◎tregoj	「示す」	19 (95%)	01 (5%)
◎them	「言う」	92 (81%)	21 (19%)
△vë re	「気付く」	06 (100%)	00 (0%)

(強断定述語◎ 弱断定述語○ 半叙実述語△ 叙実述語▽)

即ち、se補文は主節のthem「言う」、lajmëroj「報告する」、mendoj「思う」等の様な述語動詞そのものには大した意味を含まず、どちらかといえば補文の内容に伝達の中心を置きがちな補文構造であるという事になり、それ故、多くの場合に断定的述語動詞をとるものと考えられる。

4. 結論

補文内容が主節に対して相対的に高い伝達価値を持つ場合、言い換えれば主節の述語動詞が断定的述語である場合はse補文をとる。また断定的述語でなくとも叙実性のあるものならやはりse補文をとり得る。大半の述語動詞がse補文を好む傾向はこれで説明できる。ではqëはどのような場合に用いられるのだろうか。

次の例は、「クリスマスを何処で、どの様に過ごすのか？」という、予め与えられた質問に対する返答である。従って、前半のse補文の内容は特に重要性の高いことを述べているわけではない。

(12) *Nuk e kam vendosur ende se ku do t'i kaloj*
 not 3.sg.acc. decide-pf.sg.1 yet where will 3.pl.acc. pass-subj.sg.1
Krishtlindjet, por di që do jem pranë familijes sime.
 Christmas(pl)-acc.def. but know-sg.1 will be-subj.sg.1 by my family-abl.def.
 (Gazeta Shqiptare Nr.204, 24.12.1993)

「クリスマスを何処で過ごすかは、まだ決めていませんが、家族と一緒に過ごすだろう
というのは、わかっています」

つまり前半との対比で後半にqë補文が導入され、聞き手（読み手）の注意を喚起しているものと考えられる。

一方次の例では、補文内容は先行する文内容の繰り返しである。

(13) *E dimë që është vështirë, por përpiqu*
 3.sg.acc. know-pl.1 be-sg.3 difficultly but try-imp.med.sg.2
t'i kuptosh.
 3.pl.acc. understand-subj.sg.2

「（それが）難しい事は知っているが、理解してくれ」

単なる繰り返しならばse補文でも別に問題はないはずだが、前半の内容は後半で「理解して欲しい」と訴える為に必要な文である。このような条件なので特にqëが選択されるのであろう。

ここで、Finger (1990) の記述をも併せて考えると、次の様な事が言えよう。アルバニア語の場合、断定的述語動詞は本来ならse補文をとり、情報の中心は補文節に置かれる。但し、内容がさほど重要でないse補文に重要度の高い内容を後続させる場合の対比、または、先行文脈の単なる繰り返しではあるが話し手にとって重点を置きたい内容、こうした場合は改めて聞き手（読み手）の注意を喚起する為、që補文をとる。

që補文には、情報の一層の重要性を示唆する事で、聞き手の注意を喚起し話し手の認識内容を理解させる傾向がある。こうした点で、アルバニア語の動詞句補文に於ける補文標識seとqëの選択には、補文内容の法性が関与していると考えられる。

註

- (1) tēで導かれる補文は英語のto不定詞補文に似ているが、アルバニア語では不定詞が消失しており、補文内動詞は常に接続法をとる。
- (2) なお例文総数1150の内、動詞句補文を含むものは858例、名詞句補文を含むものは215例、形容詞及び副詞句補文を含むものは77例であった。
- (3) アルバニア語のtē補文は（不定詞に代わって接続法が用いられる他は、序節で述べた様に）統語論的に英語の不定詞補文に似ているが、主節に置かれる述語動詞の種類に関してもこの類似を見る事ができる。
- (4) 英語の叙実述語とは、例えば次の様なものである（福地 1985, 稲田 1989を参照）：
真叙実述語：be odd, recent, regret, be surprising等
半叙実述語：discover, find out, know, realize, see等
- (5) 英語の断定述語は、次の様に分類する事ができる（主に福地 1985を参照）：
（非叙実述語）
強断定的述語 agree, announce, answer, assert, claim, declare, explain, insist, report, say, tell, verify, write, be certain, be sure等
弱断定的述語 appear, believe, expect, guess, happen, seem, suppose, think等
（半叙実述語） find out, know, learn, notice, remember, see等

参考文献

- Buchholz, Oda & Fiedler, Wilfried(1987); *Albanische Grammatik*. (Leipzig, VEB Verlag Enzyklopädie)
- Finger, Zuzana(1990); "Albanisch që — Funktion und Leistung": *Zeitschrift für Balkanologie*, 26/1, 29-42
- 福地肇(1985); 『談話の構造（新英文法選書10）』（大修館書店）
- Hooper, J.B.(1975); "On assertive predicates": *Syntax and semantics* 4 (P.Kimball ed.), 91-124 (New York, Academic Press)
- 稲田俊明(1989); 『補文の構造（新英文法選書3）』（大修館書店）
- Karttunen, Lauri(1971); "Implicative verbs": *Language*, 47/2, 340-358
- Kiparsky, Paul & Kiparsky, Carol(1970); "Facts": *Progress in Linguistics* (M.Bierwisch & K.E.Heidolph, ed.), 143-173 (The Hague, Mouton)
- Noonan, Michael(1985); "Complementation": *Language typology and syntactic description. Vol.2* (T.Shopen, ed.), 42-140 (Cambridge, Cambridge Univ.Press)

Palmer, F.R.(1986); *Mood and modality*.(Cambridge, Cambridge Univ.Press)

橘孝司(1992); 「現代ギリシア語の補文標識について—知覚動詞構文を中心として—」

『ニダバ』21, 77-86

引用文献

Dini, Jonuz(1974); *Rritja*.(Tiranë, "Naim Frashëri")

Kadare, Ismail(1990); *Eskili. Ky humbës i madh*.(Tiranë, "8 Nëntori")

Meçaj, Vladimir(1975); *I panjohuri i Rinasit*.(Tiranë, "Naim Frashëri")

Gazeta Shqiptare (Bari(Italy))

(この他辞書等から引用多数)